

2019 年度立命館附属校新任・専任教員対象 赴任時研修

附属校教育研究・研修センター

3月29日（金）朱雀キャンパスにおいて、附属校教育研究・研修センター主催「2019年度附属校新任・専任教員対象 赴任時研修」を実施した。

参加者は、新採用27名（立命館中高3名、立命館宇治中高10名、立命館慶祥中高5名、立命館守山中高7名、立命館小2名）中、23名であった。

研修は、横澤広久一貫教育部長による「附属校教育の現状と課題」、立命館大学大学院教職研究科准教授 田中博先生による「立命館の歴史～過去・現在・未来～」の講義をお聞きした。講義の概要は以下の通りである。

1 「附属校教育の現状と課題」 横澤 広久一貫教育部長

主な内容は、各附属校の活動内容や特色とともに、私学の教員として、また立命館の教員として学ぶにあたっての心構えを、ご教授いただいた。

私立学校は公立学校とは異なり、生徒の学費によって成り立っている。だからこそ、その学費の重みとともに、生徒や保護者から、公立にはない教育を期待されていることを理解する必要があると仰っていた。その中で、公立とは違うプロ意識で、特に授業の質を高めていくこと、またクラスでの担任としての力量を上げていくことが大切であると教わった。

少子化の中では、私学としての生き残りは厳しい。立命館が選ばれる学校になるためにも、まずは目の前の生徒の意欲や満足度を上げていくことが必要であると仰っていた。そのために、丁寧なフィードバックによって、保護者の「理解と共感」を得る大切さも知った。

（記録 立命館中高 高倉 寛人）

2 「立命館の歴史～過去・現在・未来～」 立命館大学大学院教職研究科准教授 田中 博先生

立命館には3人の親がいる。名付けの親、「学問を通じて、自らの人生を切り拓く修養の場」という意味を込めて私塾「立命館」を開塾した、学祖である西園寺公望氏。産みの親、立命館大学の前身である私立京都法政学校を開校した、創立者である中川小十郎先生。育ての親、第2次世界大戦という悲惨な出来事を繰り返さないために、「自由と民主主義」を教学理念に掲げ、現在の方向性を創り上げた末川博先生。この3人が初期の立命館を作り上げた。

それから100年、立命館は全人教育、国際教育、理系人材育成を掲げ、今や2大学4附属中高1附属小学校という規模の総合学園になった。また、スーパーグローバル大学、SSH・SGH指定校、ユネスコスクール、教育課程特例校など、様々な面で日本をリードする学校となった。そして未来。

立命館で働くということは、立命館の教育だけではなく日本の教育を担っているという田中博先生のお言葉が強く印象に残っている。「教師の仕事はあるべき未来を作ることであり、その未来を決めるのは教師自身であると誇りを持つべきである。教師には高い社会性と倫理観が必要である。」と田中先生は受講者に伝えられた。

中川小十郎先生の「時代に貢献していける学校」という想いは、「世界のために貢献できる人材、世界で活躍する人材を育てる」という形で受け継がれている。

（記録 立命館中高 田井 直樹）

（編集 附属校教育研究・研修センター 羽田 澄）

